

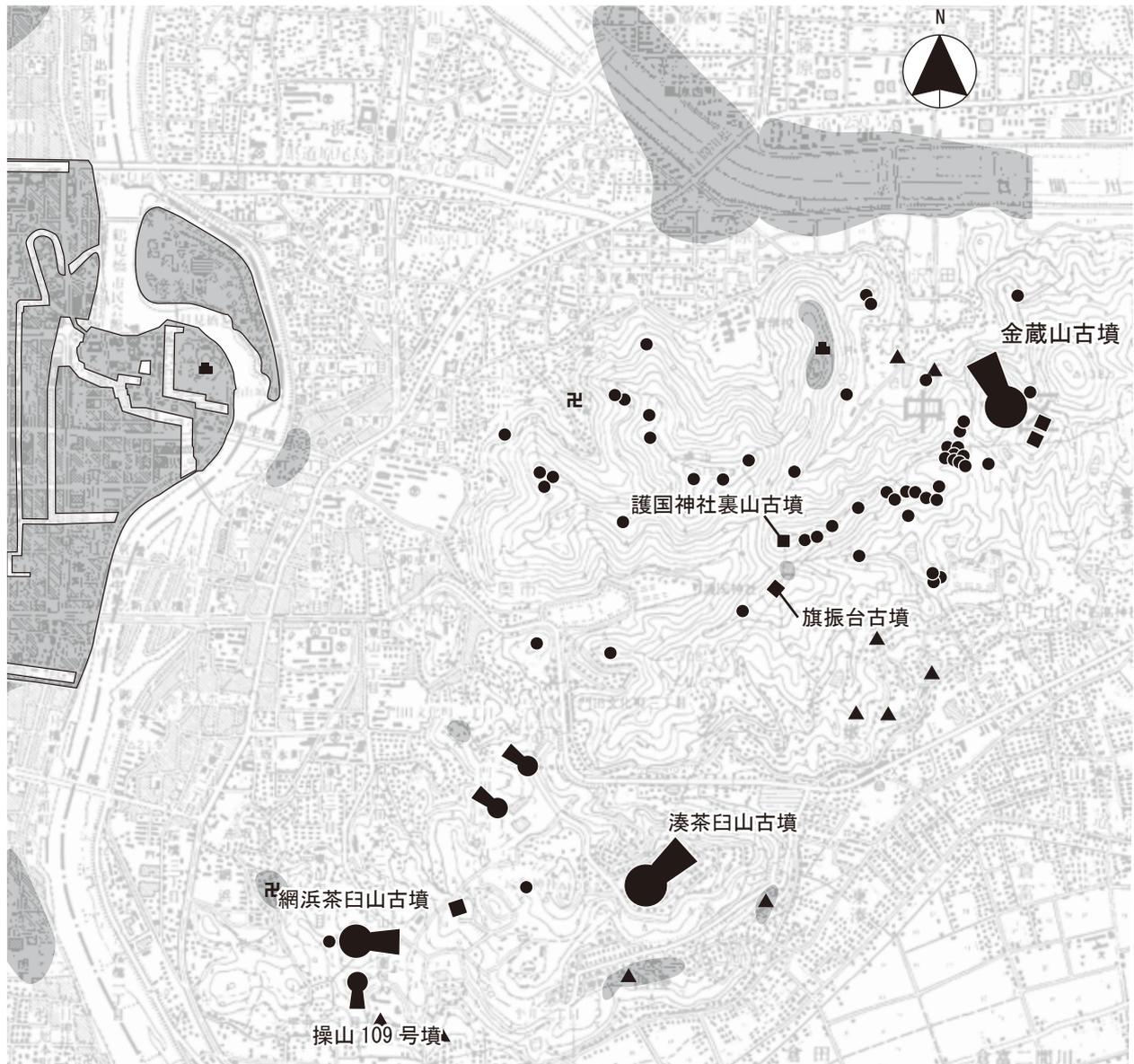
かな くら やま こ ふん  
**金 蔵 山 古 墳**

## 範囲確認調査（第3次）現地説明会資料

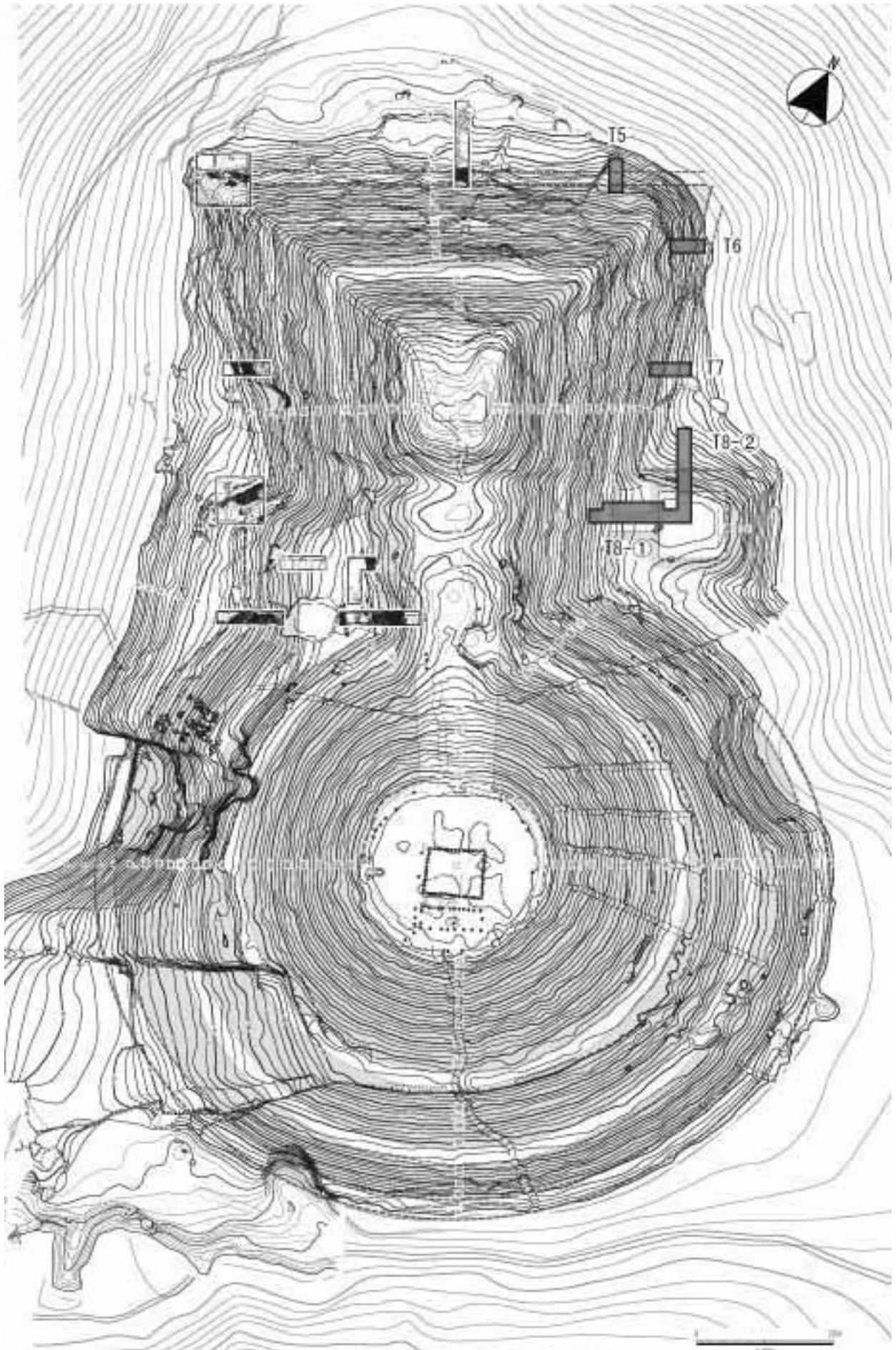
### 古墳の概要

操山丘陵のほぼ中央、標高 100 m ほどの山頂に位置する前方後円墳です。墳長 165m といわれ、四世紀後半から五世紀初頭に造られた古墳と考えられています。造山古墳築造以前では中国、四国、九州地方で最大の古墳です。明治期以降数多くの出土品が出土したといい、昭和 28 年には倉敷考古館を中心に発掘調査が行われました。発掘調査は後円部墳頂を中心に行われ、2 基の竪穴式石室、副葬品用の小石室、それぞれの石室を囲む埴輪列などが見つかるとともに、多量の副葬品、多彩な埴輪類が出土しました。

現在、古墳全体が山林となっており、古墳全体を観察することはほとんどできません。吉備を代表する古墳のひとつであり、規模や埋葬施設などの遺構、優秀な副葬品や埴輪類など学術的、学史的にも非常に価値が高く、保護や活用を図っていくことが課題となっています。



金蔵山古墳と周辺の遺跡



金蔵山古墳墳丘と調査区の位置

## 発掘調査の概要

岡山市教育委員会では金蔵山古墳の墳丘の規模、形態、構造等を追求し、将来は史跡等の保護の措置を図っていく計画で発掘調査を実施しています。これまでの調査では、前方部の西側に造り出しが附属すること、前方部西側側面、北西隅角の墳端の状況や構造が判明しました。

今年度の調査は、前方部東側斜面を中心に行っています。この地点には造り出し状の高まりがあり、測量調査で「島状遺構」の存在が推定された部分です。このほか墳端の位置や構造を追求しています。

### トレンチ 8

トレンチ 8 は造り出し状の高まりの構造、性格を追求するため設定しました。

その結果、墳丘とこの高まりの間をつなぐ陸橋が検出され、高まりがいわゆる「島状遺構」であることがわかりました。陸橋は斜面を小振りな葺石で覆っており、その下面には川原石を敷いているようです。墳丘側は前方部の 1 段目の平坦面にあたり、円筒埴輪が密集して 10 本ほど並べられています。

島状遺構の上面は全面に小さな円礫を敷き詰めていたようです。埴輪は柵形埴輪とみられる破片が出土していますが、いまのところそれ以外の形象埴輪は見つかっていません。島状遺構の北側斜面は前方部の最下段斜面から続く葺石です。その下端は墳丘の他の部分の墳端とは異なり、細かい碎石を州浜のように敷き詰めています。

### トレンチ 7

トレンチ 7 は前方部側面の墳端の位置や構造を追求するために設けました。

ここでは前方部最下段の葺石と墳端部の構造を検出しています。円筒埴輪 2 基が約 1.2 m の間隔をあけて見つかりました。後円部墳端や 1 段目より上の平坦面の埴輪列が間隔を空けず密集して並べられているのに対し、前方部墳端では間隔をあけて並べられているようです。

### トレンチ 6

トレンチ 6 も前方部側面の墳端の位置や構造を追求するために設けました。

非常に急な斜面となっており、葺石の根石の可能性のある石材がわずかに残るものの、ほかは全く残っていません。しかし、トレンチ内はすべて盛土になっており、前方部の特に前端側がかなり大規模に盛土をして形成されていることがわかりました。

なお、このトレンチ周辺は急斜面で非常に足場が悪いため、今回は公開していません。

## まとめ

今年度の調査では、東側くびれ部に「島状遺構」が存在することが判明しました。島状遺構は周辺の葺石や墳端構造、陸橋部分の葺石など非常に残りがよく、また前方部と後円部の境にもあたることから複雑な形態をとっているようです。西側くびれ部では造り出し北面で後円部と前方部に段差を設けていましたが、島状遺構周辺でどのようにこの段差をつくりだしているのかは今後の課題です。また、墳丘の両側で造り出しと島状遺構を造り分けており、その両者でどのような性格の違いがあったのか、それぞれどのようなマツリが行われたのか解明する手がかりとなることが期待されます。今回の調査では島状遺構上や周辺に配置された埴輪はほとんどわかりませんでした。今後、造り出しの埴輪群と比較できるような埴輪が見つかることが期待されます。

トレンチ6



菅石と墳端のテラスを検出しています。埴輪列は約1.2mの間隔をあけて並べています。

トレンチ7

島状遺構の裾は細かい碎石を州浜状に敷いています。

トレンチ8-2

島状遺構は墳丘と降橋でつながっています

島状遺構上面は小円礫が敷かれています。

トレンチ8-1

後円部墳端、前方部の1段目にあたる部分です。埴輪が密集して並べられています。

0 10m